「破魔変文」の物語を構築する要素について
—語りと唱に見られる表現技巧を中心に—

吉田文子 / Yoshida Fumiko
實踐大學高雄校區觀光管理學系 助理教授
Assistant Professor, Department of Tourism Management,
Shih Chien University, Kaohsiung Campus

【摘要】

〈破魔変文〉是以諸多佛經中所展示的降魔故事為題材之講唱文學。佛經皆以教義傳達為目標，變文則透析出佛經中的神奇、變幻成份，並將之轉化成吸引聽眾的娛樂性故事，兩者創作目的完全不同。因此，將各種佛經中的降魔故事與〈破魔変文〉比較，魔王號召魔軍於前的過程，魔軍成員的容貌描述，魔女的誘惑方式等，情節架構與內容上有不少差異。再者，〈破魔変文〉是以民眾為對象之娛樂性故事，在講述部分多運用種種修辭技巧，在唱詞中多投影於登場人物的情感、氣勢等，在故事表達技巧上充滿著創意與巧思。本文認為〈破魔変文〉與佛經之間最大差異在於是否追求娛樂性質。構成〈破魔変文〉故事趣味性的要素中，講述與唱詞的表達技巧是其中的重要成份，本文寫作與探討的重點即著眼於〈破魔変文〉如何凸顯其講唱表達技巧，並由此表現出故事的趣味性。本文先比較四種佛經與〈破魔変文〉的情節架構與內容，分析變文作者藉由佛經轉換為娛樂聽眾的故事過程中，所添加的各種巧思；復分析〈破魔変文〉講述部分的修辭特色，以及唱詞部分在故事架構中扮演的角色，探討其中提高娛樂效果之故事表達技巧。

【關鍵詞】

破魔變文、表達技巧、娛樂性、敦煌變文

Elements that Compose the Interest of "Po-mo Bianwen"

【Abstract】

"Po-mo Bianwen" is a saying and singing literature created based on the stories found in the Buddhist scriptures. The Buddhist scriptures were created for doctrinal evangelism, whereas most of the Bianwens were created by extracting wonder elements in Buddhist scriptures to make it a story that interests the general public. Therefore, when comparing the Buddhist scriptures with the "Po-mo Bianwen," there are various differences in the process until the Devil formed the Devil Army, the depiction of the Demon Army, and the method of temptation by the Devil's daughters, etc. Also, since it is an entertaining story for the general public, there are various ingenuity in expression techniques such as narratives with full use of rhetoric and singing with the emotions and momentum of the characters. This paper focus on the fact that the most characteristic feature of “Po-mo Bianwen” when compared with Buddhist scriptures is a story with entertainment, study the expression techniques of narrative and singing, which is essential for enhancing the entertainment.

【Keywords】

Po-mo Bianwen, expression techniques, entertainment, Dunhuang masuscrips

一、　はじめに

「破魔変文」は仏典に見られる降魔(悪魔の降伏(ごうぶく))故事を元に作られた語り物であり、魔王波旬を頭とする魔軍による攻撃の降伏、魔王の娘(魔女)による誘惑の降伏の二つの部分から成る。変文は仏典の故事を元としているとはいえ、仏典が教義伝達を目的として仏の説法を記録したものであるのに対し、変文は仏典の中の霊妙不可思議な要素を抜き出して聴衆の興味を引くような物語に仕立て上げたものであるという点で性質を大きく異にする。その為比較的似通った筋書の諸仏典と「破魔変文」とを比べてみると、魔王が魔軍結成に至るまでの過程や鬼神達の容貌描写、魔女の誘惑の方法などにおいて実に様々な相違点が見られる。また民衆を対象とした娯楽性のある語り物として、「破魔変文」には修辞を駆使した語りや登場人物の感情や勢いが込められた唱など[1]、表現技巧における様々な工夫が見られる。仏典と「破魔変文」との比較を行ったものとして、羅宗濤氏の「破魔變文題材考」、侯紀萍氏の「佛經魔女誘佛與破魔變文之比較」が挙げられるが[2]、「題材考」は表題の通り比較によって変文の出典を明らかにすることを目的としており、民衆向けの物語として工夫されたゆえの相違点など変文の娯楽性を読み解くという視点は見られない。「佛經魔女誘佛」は魔女の誘惑部分のみの比較で魔軍の攻撃など他の部分は扱っておらず、誘惑部分に関しても「変文の描写は表面的で仏典の素晴らしさに及ばない」とするなど、筆者とは意見を異にする[3]。また両著とも内容や筋書の比較を主としており、変文の語りや唱に見られる表現技巧やその効果についての考察を目的としたものではない。本稿では諸仏典との比較における「破魔変文」

[1] 通常講経文や変文の形式的特徴を語る際には「『散文と韻文』が交互に出現する」、という言葉が用いられるが、この際の「散文」は七言句から成る韻文の部分に対して比較的散文的である、という意味で使われており、実際には字句構成が整った部分や対句の連続、押韻といった韻文的要素が含まれ、純然な散文とは言い難い。本稿では実質上の散文との混同を避けるため、「講唱文学」の「講唱」にヒントを得た私訳の「語りと唱」を使用する。

[2] 羅宗濤「破魔變文題材考」、『敦煌講經變文研究』(1972 年政治大學博士論文、『中國佛教學術論典 104』高雄・佛光山文教基金会、2001 年)所収。以下本稿では「題材考」と略称する。侯紀萍「佛經魔女誘佛與破魔變文之比較」『東呉中文研究集刊』第 13 期、東呉大學中文研究所學會、2006 年 6 月。以下「佛經魔女誘佛」と略称する。

[3] 「仏典の叙事技巧は薄弱ではあるが、情欲描写に関しては濃厚且つ露骨で読者の想像を掻き立てるものである。変文は魔女の誘惑を主要部分としながらもその描写は表面的で、閲読に際しては仏典の素晴らしさに及ばない(佛經的敘事技巧雖薄弱、但情慾描寫深刻露骨、引人遐想。『破魔變文』雖以魔女誘佛為主幹、但多描繪表面事物、在閱讀上不及佛經精彩)」(「佛經魔女誘佛」118 頁)。

の最大の特徴は即ち娯楽性のある物語であるという点に着目し、「破魔変文」の物語としての面白さを構築する要素の内、その娯楽性を高める上での肝要と目される語りや唱に見られる表現技巧に焦点を当てて考察する。その第一段階として先ずは仏典と「破魔変文」の筋書や内容における主な相違点を纏め、「破魔変文」が民衆向けの物語として工夫されたゆえの違いについて明らかにする。次に語りに見られる修辞の特徴や唱の役割を捉えることにより、表現技巧における物語を盛り上げるための工夫について考察する。尚、本稿では粗筋・訳文作成や修辞技巧分類の際の主なテキストとして、数多くの校勘意見を取り入れ仏教用語には仏典の用例を引くなど丁寧な語釈が付けられている『敦煌變文選注』を使用し[4]、校勘部分は『敦煌變文講經文因緣輯校』も参考とした[5]。

二、筋書や内容に見られる仏典との相違点について

降魔故事は数多くの仏典の中に見られるが、その内「破魔変文」の筋書に近いものとして『佛説觀佛三昧海經』『方廣大莊嚴經』『普曜經』『佛本行集經』『根本説一切有部毘奈耶破僧事』などの十三点が挙げられる[6]。これらの仏典のほとんどでは魔女の誘惑が先で魔軍の攻撃はその後に描かれているが、変文では魔軍の攻撃が先で魔女の誘惑はその後となっており、変文と同じく魔女の誘惑が後半であるものは『佛説觀佛三昧海經』『根本説一切有部毘奈耶破僧事』の二点のみである。次章で改めて採り上げるように「破魔変文」の表現技巧において最も秀逸な部分は魔女の誘惑の場面であるといえるが、魔女の誘惑を前半ではなく後半に描いているという点からしても、変文は魔女の誘惑を物語の最大の要所として作られたものである

[4] 項楚選注『敦煌變文選注』(成都・巴蜀書社出版、1988 年初版・2002 年増訂本出版。以下本稿では『變文選注』と略称する)に収録の「破魔變」は『敦煌變文集』(王重民他編、北京・人民文學出版、1957 年)の「破魔變文」を原文としてそれに校註を付けている。『變文集』では P2187 と S3491 の二種類の文献を元に校勘を行なっており、P2187 は黄永武主編『敦煌寶藏』(台北・新文豐出版、1986 年)第 116 冊(384-385 頁)に、S3491 は第 29 冊(105-111 頁)に収録されている。

[5] 周紹良・張湧泉・黄征輯校『敦煌變文講經文因緣輯校』(南京・江蘇古籍出版、1998 年。以下本稿では『變文輯校』と略称する)。前書きによると、校勘に際しては先ず張・黄両氏が底本となる原本を『敦煌寶藏』収録の画像から書き写し、それに同文献の異本を見て校註を付けた後、周氏がそれらを纏めると共に過去の閲読の際の校訂意見を盛り込んで校録を施す、という方法が取られている。「破魔変文」の校勘には『變文集』と同様に P2187 と S3491 を用い、P2187 を底本としている。

[6] 「題材考」74-76 頁参照。

ということが分かる[7]。「はじめに」で言及のように、羅氏の「題材考」に見られる比較には物語として工夫されたゆえの相違点など変文の娯楽性を読み解くという視点は見られず、侯氏の「佛經魔女誘佛」は魔女の誘惑部分のみの比較で、その誘惑部分に関しても筆者とは意見を異にする。本章では娯楽性を追求しているか否か、聴衆を惹きつけるための工夫が成されているか否か、といった観点からの比較を行うことにより、「破魔変文」が民衆向けの娯楽作品として工夫されたゆえの相違点について考察する。本章での比較の目的は仏典の故事が変文に変換される際に施された創作上の工夫を明らかにすることにあるため、筋書や内容が最も似ている『佛説觀佛三昧海經』の他、鬼神の容貌や魔女の誘惑の描写法などに変文との大きな違いの見られる『方廣大莊嚴經』『普曜經』『佛本行集經』も比較の対照とした[8]。本章第二節の比較考察においては仏典四点をそれぞれ觀佛三昧・方廣・普曜・佛本行と略称し、また「破魔変文」は変文と略称する。

（一）「破魔変文」粗筋

筋書・内容の比較に先立ち、以下に「破魔変文」の粗筋を纏める。「破魔変文」の冒頭には仏教の無常や輪廻などの思想を語る「押座文」、土地の統治者であった曹氏兄弟などに向けた祝辞からなる「発願文」が、末尾には曹氏への賛辞からなる「解座文」が見られる。『變文選注』では語りと唱との纏まりごとに校註がつけられており、その区切りに従うと押座文・発願文・解座文を除いた物語の部分は六つの部分に分けられる。ここでは六つの場面に⑴から⑹までの番号を付し、次節や次章の考察で該当場面を示す際に用いることとする。

⑴悉達太子は六年間の苦行を終えて菩提樹の下に座し成道する。それを知った魔王波旬は大いに怒り、魔界の者達が教化されて仏門に鞍替えしてし

[7] 魔女の誘惑が主要部分として後半に置かれている理由について、羅氏は「当時は婦人による乱国が度々見られたためか、国同士の争いの後に美女を差し出して和解を求めることが多かったためではなかろうか(蓋其時習見婦人亂國、或兩國兩地交戰後、輒以美女乞和者歟?)」としている(「題材考」80 頁)。変文は魔女の誘惑を主要部分としつつも諸仏典に見られるような多彩な媚態描写が見られず、醜悪な姿の描写も簡略化されている。この点については、本章第二項の「4.誘惑前の準備と誘惑の方法」「5.魔女の醜い姿の描写」を参照されたい。

[8] 『佛説觀佛三昧海經』巻二「觀相品」、『方廣大莊嚴經』巻九「降魔品第二十一」、『普曜經』巻五「召魔品第十七」巻六「降魔品第十八」、『佛本行集經』巻二十七「魔怖菩薩品第三十一」上。本稿では『大藏經』(大正一切經刊行會編[1924-1934 年]、台北・新文豐発行、1983 年)に収録のものをテキストとした。方廣・普曜・佛本行は『大藏經』第 3 冊「本縁部上」に、觀佛三昧は第 15 冊「経集部二」に見られる。

まうのを防ぐため、鬼神や妖鬼を呼び集めて先制攻撃を仕掛ける決意をする。⑵魔王の呼び掛けに応じてあまたの鬼神達が集まり、各々武装して勇猛な軍隊を成し、息巻きながら仏のもとへと突撃する。⑶霊妙不可思議な装備を施した仏を前に魔軍は恐れをなし自滅してゆく。魔王は軍を早々に引き上げ天の魔宮に逃げ帰る。⑷宮中で浮かない表情を浮かべる魔王。魔王の三人の娘はその訳を知ると、「自分たちが仏を惑わし成道を阻んでみせる」と申し出、美しく着飾り仙女達を伴に従え、音楽を奏でながら仏のもとへ向かう。⑸三人の魔女は順繰りに自分の美貌や品の良さなどを自慢し、「あなたに一生お仕えします」と申し出るも悉く拒絶され、「さっさと天界に帰れ」と追い払われる。⑹仏の拒絶に構わず尚も出鱈目を捲し立て撹乱を続ける魔女達。仏は魔女達を醜い老婆に変えてしまう。嘆き悲しみ許しを請う魔女達に、仏は以前に勝るとも劣らぬ美しい姿を与えてやる。魔女達は喜び改心して天界へと帰って行き、事情を知った魔王は以後大人しくなる。

（二）筋書・内容比較

１．悉達の成道を知った魔王の反応

方廣・普曜では仏が白毫から光を放って魔宮を照らし出すと魔王は「三十二變(不祥の相)」を夢見ており、「魔王は夢から覚めると戦き慄(ふる)え恐懼した」「魔王は不祥の相を夢見、目覚めると恐怖を覚えた」といったように[9]、いずれも仏に対して畏怖の念を抱いている。佛本行には不祥の相を見るくだりはないが、仏が菩提樹の下に座した時「心の内に大きな恐怖の念が生じた(内心生大恐怖)」という一文が見られる。変文は「仏が座位に就いただけで魔宮が揺れ動いた(纔登座上、震動魔宮)」という叙述のみで魔王が不祥の相を夢見るくだりがなく、魔王が恐怖を覚える叙述もみられない(場面⑴)。変文の魔王は恐れることを知らぬどころか、仏の影響力が自分の門徒達に及ぶのを防ぐため軍を結成して先制攻撃を仕掛ける決意をする。語りに続く唱の中では仏に怒りを覚え「叩きのめしてやる」と息巻く様子すら描かれている。仏典は教義伝達を目的として編まれたものであり、魔王の畏怖の念は絶対的存在としての仏の威厳や偉大さを表すことになるが、物語として見た場合、悪役である魔王が戦う前から相手を恐れているよう

[9] 方廣「魔王波旬從夢寤已、逼體戰慄心懷恐懼」、普曜「魔於夢中見是諸變、時從夢起心中恐怖」。

では面白みを欠くことになる。変文では物語としての面白さを追求するために、敢えて魔王を仏をも恐れぬ身の程知らずの悪人として描いているのである。

２．魔軍結成と攻撃に至るまでの展開

普曜・方廣・佛本行の魔王は仏攻撃について魔界の門徒達に相談し、門徒達は賛成派・反対派に分かれて代わる代わる意見を述べるが、変文にはこのくだりは見られない。変文では魔王の意見に反対する者が一人もいないばかりか、魔王の呼びかけに直ぐ様応じて軍隊を成し、戦闘態勢に入って仏のもとへと突撃する((2))。仏典三点は門徒達の賛成・反対問答を差し挟むことによって仏を攻撃するか否かで逡巡する様を描き、また反対派の門徒の意見を通して仏が如何に特別で歯が立たぬ相手であるかを言い連ねることにより、仏相手には魔界の王者といえども思い通りには事が運ばない様相や仏の偉大さを強調している。それに対し変文は、魔王の呼び掛け、魔軍結成、仏のもとへ突撃、というように、事が澱みなく進むスピード感のある展開となっており、魔王と同様に仏を恐れぬ門徒達の勢い盛んな様を描いている。場面(1)に魔王の畏怖の念が描かれていない理由と同様で、手下の意見を聞いて逡巡する場面の挿入は物語としての面白みを削ぐことになる。変文では魔王やその門徒達を仏をも恐れぬ身の程知らずの悪人集団として描くことにより、魔王達の滑稽なまでの愚かしさを表現すると同時に、次の場面で描かれる魔軍の無残な敗北ぶりを一層際立たせている。

３．鬼神や妖鬼の容貌描写

魔軍結成の場面において、方廣・佛本行では招集された鬼神や妖鬼のグロテスクで薄気味悪い容貌が描かれ、「血肉乾いて骨皮くっつく者、体から溢れ出す膿を啜りあう者、切った自分の手足をばらまく者」「人の頭を手に持つ者、死人の手足・骨肉・肝胆・胃腸を手に取り喰らう者、毒蛇手に取り喰らう者、蛇を首に巻く者、手に髑髏を掲げ持つ者、髑髏の髷飾りをつける者」といった描写が延々と続く[10]。変文は方廣・佛本行のおぞましい描写に比べるとかなり控えめであるが((2))、それは変文が個々の鬼神の不気味さよりも、鬼神達が魔王の意気に賛同してあっという間に勇猛な軍隊を成して仏のもとへと突撃するスピード感のある筋書展開に重点を置いてい

[10] 方廣「或血肉枯竭皮骨相連、或身出膿血更相飲吮、或自截支節撩亂委擲」「或持人頭、或執死人手足骨肉肝膽腸胃而噉食之、或執毒蛇而食、或以蛇纏頸、或手擎髑髏、或著髑髏之鬟」。

る為と考えられる。また変文はグロテスクな容貌描写が少ない代わりに、語りでは鬼神達の武装の様子や役職、守備位置などの詳細が、続く唱の中では仏打倒に息巻く鬼神達の様相など魔軍の荒々しく血気盛んな様相が存分に描かれている。変文には筋書展開や人物・情景の描写などに物語としての効果を高める様々な工夫が見られるのに対し、方廣・佛本行では恐怖心や嫌悪感を呼び起こすような容貌描写が延々と続き、物語の構成としては冗漫な感がある。觀佛三昧に至っては鬼神達の容貌描写に止まらず、閻羅王や獄卒の登場に伴って地獄のおどろおどろしい情景が事細かく描かれている。物語としての面白さを追及する変文とは異なり、仏典は教義を伝達するための経典として、仏とは対極の邪悪なものの存在やそれらの住む欲界の存在など、仏教の世界観を表すことに重点を置いているということが分かる。

４．誘惑前の準備と誘惑の方法

方廣・普曜・佛本行の魔女は魔王の命を受けて直ぐ様仏のもとへと到って誘惑の仕草を繰り出しており、変文の場面⑷に見られるような美しく着飾り仙女達を伴に従えて行列を成し、音楽を奏でながら仏のもとへ向かう、といった描写は見られない。觀佛三昧には変文と同じく美しい装いや行列の描写が見られる他、魔女が魔王の苦悩を知って自発的に「自分達が成道を阻止してみせる」と申し出る、という点も変文と同様である。方廣・普曜・佛本行では魔王の命令によって受動的に、しかも何の準備もなく直接仏のもとへと出向いており、変文や觀佛三昧に比べると物語性に欠ける筋書となっている。

誘惑の場面において普曜・方廣・佛本行の魔女達は様々な仕草を繰り出して誘い掛けており、意味ありげにじっと見つめる、衣をちらりとめくって見せる、魔女同士で体に触れ合う、瞬きして挑発する、結い上げた髪を解く、といったように、妖艶な仕草の数々が見られる[11]。変文には仕草や表情による誘いが全く見られず、自分の美貌や品の良さなどを自慢し「あなたに一生お仕えします」と申し出るといったような、発話内容による誘惑

[11] 普曜と方廣に見られる仕草はほぼ同じで、佛本行は普曜・方廣と類似の仕草以外に、乳房を弄ぶ、下半身を露出するなどかなり露骨な表現が見られる。以下にいくつか挙げると、方廣「揚眉不語」「舉衣而進」「展轉相調」「迎前蹤蹀」「開目閉目如有所察」、佛本行「數數顧盼觀瞻菩薩」「或解散髻、以手梳髮」「或數數解脱衣裳」「或數數褰發內衣」。また、佛本行・方廣では仕草による誘惑の描写の後に七言の偈が続き、言葉巧みに誘いかける様子が描かれている。

である((5))。觀佛三昧にも変文に似た誘惑の描写があるが、変文のように三人の魔女が三度に渡って誘い掛けるのではなく、一度切りの誘い掛けである。前述のように方廣・普曜・佛本行では何の準備もなく直接仏のもとへと出向いており、装いや髪型などの美しい見た目ではなく、情欲的な仕草によって訴えかける極めて直情的な誘惑方法である。変文の誘惑方法が仏典に比して控えめな理由については次項にて改めて言及するが、変文が文字ではなく音声手段で表現する語り物であったことを考えると、刹那的・直情的な仕草を表す言葉を言い連ねるよりも、「美女があなたのそばで一生奉仕する」といった発話内容による誘いのほうがむしろ聴く者の想像をより豊かに膨らませることになり、物語としての効果が高いといえよう。

５．魔女の醜い姿の描写

觀佛三昧の仏は魔女達を見るも恐ろしい姿に変えてしまう。体内にはおびただしい数の虫が沸き、背には醜い老婆、胸には死んだ子供を抱くなど、おぞましい有様がつぶさに且つ延々と描かれる[12]。普曜の魔女も仏によって老婆に変えられてしまうが、觀佛三昧のように延々と続くグロテスクな姿の描写は見られない。佛本行には「おまえの体は清らかでなく、虫が千の穴を出入りしている」、方廣には「姿形がよくても心が端(ただ)しくない。汚物を盛った瓶のようだ」というように仏の目に映る魔女の姿が描かれているが[13]、仏の力によって姿を変えられるくだりは見られない。変文では仏が指差すと魔女は醜い老婆に変わるが、その醜悪な姿の描写は觀佛三昧のグロテスクな描写に比してかなり控えめで極短いものである((6))。觀佛三昧に描かれる魔女のおぞましい様相は前述の鬼神達の不気味な容貌(方廣・佛本行)と同様に恐怖心や嫌悪感を呼び起こすものであり、魔女の仕草による誘惑(普曜・方廣・佛本行)の直情的であからさまな表現にも通じるところがある。羅氏の「題材考」では、変文には仏典に見られるような魔女の媚態の描写がなく魔女の醜い姿に関しても極短いものにしている理由として、聴衆の中に役人やその家族などがいたという点を挙げ、「猥褻な内容は元より相応しくなく、聴衆の中には幼い子供達がいたことを考えると、過度に恐

[12] 「以白毫擬、令天三女自見身内膿曩涕唾、九孔筋脈一切根本、大腸小腸、生臓熟臓、於其中間、迴伏婉轉蛹生諸蟲、其數滿足有八千戸、戸有九億諸小蟲等」「時三魔女、自見背上、復負老母、髪白面皺、唇口喎僻、手脚繚戾、顔色津黑猶如僵尸。胸前復抱一死小兒、於六竅中流出諸膿、膿中生蟲正似蚘蟲」。

[13] 佛本行「我觀汝體不淨流、諸虫周匝千萬孔」、方廣「形體雖好而心不端、譬如畫瓶盛諸穢毒」。

ろしい内容は適切ではないため削除したに他ならない」としている[14]。羅氏の指摘の通り聴衆の顔ぶれを考慮したためというのも尤もな理由であるが、仏典を変文に転換する際の創作上の工夫という観点からして、原文のように過度にグロテスクで生々しい言葉の羅列によって聴衆に恐怖心などの情動ばかりを呼び起こすのは変文の意図するところではなく、物語性の高い作品として、筋書展開や表現技巧に趣向を凝らすことによって聴衆の想像力を刺激し惹きつけることこそが意図するところであったため、とも考えられる。

三、語りと唱の構造について

「破魔変文」の表現技巧において最も秀逸な部分を挙げるとすれば、それは場面⑸の「魔女の誘惑」であることは間違いないが、それ以外の部分にも物語の面白さを構築する上での要となる表現が数多く見られる。この章では先ず「魔女の誘惑」以外の部分の語りに見られる修辞の特徴や唱の役割について明らかにし、次に「魔女の誘惑」の表現技巧について考察する。本章に引用の原文の下線は対句部分を表し、二句一対、四句一対など対句の一つの纏まりを一区切りの連続した下線で示す。文字の校勘は項氏のテキストに従い欠字の補足は〔　〕、誤字の修正は(　)で示す[15]。原文の語感やリズムを正確に読み取るため、原文読解や分類、考察を終え、論文の構成がほぼ定まった最終段階において訳出を行った。訳は紙幅の都合で本稿末の[付録]に纏めて記したので参照されたい[16]。

（一）語りに見られる修辞技巧

①當時差馬頭羅剎哲(暫)為遊弈將軍、捷疾夜叉保(補)作先鋒大將、鳩槃吒鬼排戈戟以**前**行、毗舍奢神領甲兵而**後**擁。召阿修羅軍衆為突將、則

[14] 「其所以如此者、蓋其時聽衆有高貴之府主、復有父女、母子、長官僚屬種種關係、涉及猥褻、固非其宜、且聽衆中有小娘子・郎君、則齒及過於恐怖者、亦非得當。故盡刪削之耳」(「題材考」82 頁)。

[15] 原文の中には文書作成ソフトには存在しない字体がいくつかあり、①の「披閃雷作朱旗」「披旗弄於山川」の「披」を項氏は誤字として修正しているが、その字が俗字(手偏に波)で打ち出せないため、『變文輯校』の同義の修正意見「簸」を代用する。また①の「努目揚精」の「努」(原文は奴の下に目)、「未邈其形」の「邈」(原文は貌に心)、⑥の「捨記(愆)莫記生念心」「捨放前愆」の「愆」(原文は人偏に夫夫と心)も原文通りのものは打ち出せないためこれらの同義の字体を代用する。『變文選注』と『變文輯校』とで校勘意見が異なる部分については各引用文の文末脚注に挙げる。

[16] 既存の訳として『仏教文学集(中国古典文学大系 60)』(平凡社、1975 年)に所収の入矢義高氏の手によるものがあるが、本稿の独自性を打出すために敢えて拙訳を作成した。

努目揚精、舍(合)毗脅(荔)多神後隨、而乃乍瞋乍喜。更有夜叉虞候、羅剎都巡、並劍[齒]戟牙、利毛同(銅)爪、手持鐵棒、腰帶赤虵。驅精魅以**前**行、魍魎鬼神在**後**。閻羅王為都統、總管諸軍、五道大神兼押衙大將、又知斬斫。喚風伯雨師作一營、呼行病鬼王別作一隊。妖婆**万**衆(種)、有耳不聞、器械**千**般、何曾眼見。然後辟**兩**陣、分**四**厢、右(**左**)繞**右**遮、**前**驅**後**截。用霆雷為戰鼓、披(簸)閃雷作朱旗、縱猛風以**前**蕩、勒毒龍而向**後**。蚖虵盤結、偏地盈川。神鬼交横、搖精動目。更有飛天之鬼、未邈其形。或**五**眼**六**牙、**三**身**八**臂、**四**肩**七**耳、**九**口**十**頭、**黄**髮**赤**髭、**頭**尖**額**闊。或**腕**麁**臂**細、**頭**小**脚**長。披(簸)其(旗)弄於山川、呼吸吐其雲霧。搖動日月、震撼乾坤。作啾唧聲、傳波吒號。魔王自領軍眾、來至林中。**先**鋪靉靆之雲、**後**降潑墨之雨。方梁欄木、榥塞虚空。捧石擎山、昏蔽日月。強風忽起、拔樹吹沙、天地既不辯(辨)**東西**、昏闇豈知**南北**。[17]

魔軍結成の模様が描かれた部分で(⑵)、字数が揃わない部分も内容的には対になっており[18]、ほぼ全体に渡って四・六言句を主軸とする対句の連なる排偶対を成している[19]。「羅刹(らせつ)が巡邏将軍なら夜叉は先鋒大将」「鳩槃茶(くはんだ)が前を行けば薜荔多(へいれいた)が後ろを守る」「手には鉄棒、腰には赤蛇のベルト」という風に陣営の中での役職や守備位置、武装の様子が対で描かれ[20]、それらを羅列することにより、鬼神達が続々と登場しあっという間に勇猛な軍隊を成す様がスピード感を伴って描かれている。また、この段前半の対句中には「前後、左右、千万」などの鑲嵌(じょうかん)が多く見られる[21]。対句は元より文意

[17] ①の校勘意見で『變文選注』と『變文輯校』で異なる部分は以下の三箇所である(以下、選は『變文選注』、輯は『變文輯校』を示す)。選「利毛銅爪」、輯「利毛(矛)銅爪」。選「未邈其形」、輯「異貌奇形」。選「四肩七耳」、輯「四眉七耳」。
[18] 内容的に対と見なせる部分は原文中に破線で示した。
[19] 黄慶萱著『修辭學』(台北・三民書局、1975 年)には「排対」の定義として「二つ以上の対句によって構成されたものであり、排偶対、排比対とも称する」(621 頁)とある。本稿では後述の排比と区別し易い「排偶対」を用いる。中国語の修辞法に関する定義や用語は著書によって異なることが間々あるが、本稿においては黄氏の『修辭學』に従うこととする。
[20] 羅氏はこの場面に見られる鬼神の名前や役職名について、「風師・雨伯は恐らく西域由来の神ではなく中国固有のものである(風師・雨伯、則恐非西來之神、而為中土所固有者也)」「鬼神達の役職名は唐代の役人が用いていたものである(各鬼神之官銜、則皆唐人所習用者)」と指摘している(「題材考」78 頁)。中国土着の神の名前や唐代に実際に使用されていた役職名の使用は、西域由来の仏典を中国人に馴染みやすい物語にするための工夫であるといえよう。
[21] 鑲嵌は数字や東西南北、春夏秋冬といった特定の文字を言葉や文の中に当て嵌める技巧である(前掲『修辭學』719 頁参照)。原文中のゴシック体は鑲嵌部分を示す。

明確化によって物語の情景をイメージし易くする機能を持つが[22]、それに「前、後」「左、右」といった位置の鑲嵌や「兩、四」「千、万」といった数字の鑲嵌が加わることにより、鬼神達が各々の守備位置に着き陣営の前後を固める様(鳩槃吒鬼排戈戟以前行、毗舍奢神領甲兵而後擁。縱猛風以前蕩、勒毒龍而向後)、整然と分かれて陣形を成す様(辟兩陣、分四廂)、おびただしい数の妖鬼や武器(妖婆万種、有耳不聞、器械千般、何曾眼見)、魔軍が前後左右と周囲の守備を固め威嚇する様(左繞右遮、前驅後截)などがよりリアルに浮かび上がってくる[23]。このように数字や特定の文字を所々に当て嵌める技法である鑲嵌は対句の文意明確化機能を高めると同時に、文字が句中や句間で連鎖することにより語りの口調にテンポの良さを生み出し聴衆の耳に心地よく響いたことが想像される。また、この段後半に見られる妖鬼の容貌描写(五眼六牙、三身八臂、四肩七耳、九口十頭、黄髪赤髭、頭尖額闊)には数字や色などの鑲嵌を含む排比が見られ[24]、四言の連なりと文字が連鎖する鑲嵌の効果とが相まって軽妙なリズムを生み出している[25]。前章で言及のように方廣・佛本行の魔軍結成部分では鬼神達の薄気味悪い容貌描写が延々と続くが、そこには数字や色彩などの鑲嵌が数多く使用されており[26]、変文の鑲嵌を用いた表現は明らかに仏典の表現の影響を受けたものであるといえる。しかしながら仏典が鬼神達の容貌描写に終始して冗漫な感を与えるのに対し、変文は魔軍の細部から全体像に渡るまでの様相を鑲嵌を含む排偶対や排比によって映像的且つリズミカルに描きだしてお

[22] 中国語の対句の特質を端的且つ的確に言い表したものとして松浦友久氏の論文の一節を引用する。「対偶表現の三段階を系統化するとすれば、第一段階としての『自己完結機能(文意明確化の明示機能)』、第二段階としての『説得機能』、第三段階としての『美的機能』が、同心円的かつ相互浸透的に、可変的な比重で作用している―と見るのが妥当であろう。」松浦友久「対偶表現の本質―関連諸説との比較において―」(『文芸論叢』第 42 号、大谷大学文芸研究会、1994 年 3 月)7 頁。

[23] 鑲嵌を含む排偶対は場面⑷の語りにも見られ、「**東**鄰美女、實是不如、**南**國娉人、灼然不及」には中国古来の絶世の美女達をも上回る魔女の美しさが、「仙娥從**後**、持寶蓋以後隨、織女引**前**、扇香風而塞路。召六宮彩女、發在**左**邊、命一國夫人、分居**右**面」には美しい天女達で周囲を固めた煌びやかな行列の様が効果的に表現されている。

[24] 『修辭學』では排比を「三つ或いは三つ以上の構造が似通い、語気が一致し、字数がほぼ同数の言葉や文で、同範囲や同質のイメージを表すもの」(651 頁)とする。排比は原文中に波線で示した。

[25] 排比は場面⑹の語りの醜い姿に変えられた魔女達の容貌描写(眼如朱盞、面似火燈、額闊頭尖、胸高鼻曲、髪黄齒黑、眉白口青)にも見られ、ここにも「黄黒、白青」といった色彩の鑲嵌が効果的に用いられている。

[26] 佛本行「或全無眼、或唯一眼二眼三眼、乃至多眼。或復無耳、或復一耳二耳三耳、乃至多耳。或復無手、或復無臂、或復一手二手三手、乃至多手」、方廣「或復面色全赤全白全青全黄、或有半黄半青半白半赤、或作煙燻之色、或作死灰之色」。

り、変文は仏典の影響を受けつつも、物語の効果を高めるための様々な工夫が凝らされたものであるということが分かる。

②如來所持器杖、與彼全殊。且着忍辱甲、執智慧刀、彎禪定弓、端慈悲箭、騎十力馬、下精進鞭。慚愧刀***而未***舉、鬼將驚忙、智慧劍***而未***輪、波旬怯懼。垂煙吐炎***之***輩、反被***自***燒、戴石擎山***之***徒、***自***沉***自***墜。外道等弓欲張而弦即斷、箭欲發時花***自***生、槍***未***盤***而自***折、劍***未***輪***而***刃落、霑雷飜為梵響、雹子變成珍珠。紅旗出沒、香風***自***生、猛火黑煙、栴檀霧降。我佛現其定力、外道波旬無門怯懼。

仏を前に魔軍が敗れゆく様を描いた場面で(⑶)、①と同様に四・六言句を主軸とする対句の連なる排偶対を成している。冒頭には仏の装備の様が四言句の六連続によって描かれ、続く魔軍の劣勢の描写部分には「而、未、自」などの類字の使用が多く見られる[27]。仏が刀剣を振りかざすまでもなく驚き怯え(慚愧刀而未舉、鬼將驚忙、智慧劍而未輪、波旬怯懼)、槍や剣は使わぬ内に駄目になってしまう(槍未盤而自折、劍未輪而刃落)、というように、類字(而、未)を含む隔句対や単句対によって仏を前にして全く歯の立たぬ有様が効果的に描かれている。また、自分が放った攻撃によって自ら焼かれ押し潰され(自燒、自沉自墜)、武器はひとりでに崩れ折れ(自折)、攻撃しようとすると自ずと蓮の花咲き芳しい風が吹く(花自生、香風自生)、といったように「自」が断続的に用いられ、悪の自滅と善の自生を導く仏の摩訶不思議な威力が描かれている。このように句中または句間で断続的に同じ字音を繰返す類字が所々に出現し、語りの中にリズミカルな調子を生み出している。「誰が怯えれば彼も怖がる」「こちらが崩れればあちらも崩れる」「あちらがダメならこちらもダメになる」という風に対句が羅列すると同時に類字が頻出することにより、魔軍の全面的な敗北と次から次へと崩れ去るスピード感ある展開がリズミカルに描かれている。

（二）唱の役割

③魔王忿怒在逡巡、廣點妖邪之(諸)鬼神。覩見如來今出世、雄心㝵耐便生嗔。不了自家邪神呂(類)、擎山覆海滅金人。處分鬼神齊用命、捉將[如]來暢我身。

[27] 同じ文字や言葉を連ねる畳字に対し、句中や句間において同じ文字や言葉を断続的に繰返すのが黄氏の定義における「類字」である(『修辭學』531 頁「類畳」参照)。原文中のゴシック斜体は類字部分を示す。

魔王の「先制攻撃を仕掛けて成道を邪魔してやる」という語りの中のセリフに続く唱で(⑴)、「魔王は一頻り激怒する」「雄心たまらず怒り爆発」「自分が邪神だということも省みず、山を挙げ海を引っ繰り返す勢いで遣っ付けようとする」「心ゆくまで懲らしめてやれ」というように、魔王の怒りに満ち満ちた様子や、身の程もわきまえずただひたすら仏を遣っ付けてやろうと意気込む様が七言八句の唱によって描かれている。この唱の前の語りの部分には門徒を集めて攻撃を仕掛けることを決意する様子のみが描かれ、魔王の怒りや仏打倒の意気込みを表す言葉は見られず、唱が語りには描かれていない登場人物の感情や勢いを表現する役割を果たしている。このような役割を持つ唱は魔軍結成の場面(⑵)にも見られ、「瞿曇(くどん)が死ぬまで戻ってはならぬ」「殺(や)れ！殺(や)れ！との号令ばかりが聞こえる」「如来を心ゆくまで懲らしめてやる」といったように[28]、仏打倒に息巻く血気盛んな模様など、語りには描き尽くされていない魔軍の気勢が表現されている。

④魔王神變總騁了、不能搖動我如來。<u>寶劍纔揮刃即亡、弓欲張而弦即斷</u>。擎山撮海騁神通、方梁櫑木遍虛空。擬害如來三界主、恰似落葉遇秋風。魔王自為督(都)元帥、怕急潛身無處容。遂向軍前親號令、火急抽兵却歸宮。不念自是邪神類、比並天中大世尊。羅漢雖然是小聖、力敵天魔萬萬重。鬼神類、萬千般、變化如來氣力灘。任你前頭多變化、如來不動一毛端。

魔軍が敗れ崩れる様子を描いた前掲②の語りに続く唱である(⑶)。「魔王は方術を尽くすも如来を揺るがすことならず」「何千万種もの鬼神達が攻撃の手を尽くし力使い果たす。どんなに攻撃を仕掛けても如来は毛一本も動かない」というように、魔軍の如何なる攻撃にも微動だにしない仏の有様が唱われている。また、「三界の王である如来を攻撃しようとするなんて、まるで秋の風に吹かれる落葉のよう」「魔王は恐れをなし慌てて身を潜めようとする」「自分が邪神であることを省みず、お釈迦様に無謀な力比べを挑む」というように、魔軍の身の程知らずに戦いを挑む様や軟弱ぶりを揶揄するような口調で唱っている。直前の語りでは魔軍が次々と自滅してゆく様がスピード感を伴って描かれているのに対し、唱では魔軍の攻撃にびくともしない仏の様相、自分達より遥かに格上の相手に無謀な戦いを挑む魔

28 「瞿曇未死不歸還」「號令唯聞唱煞聲」「擬捉如來暢奴情」。

軍の愚かしさなど、語りとは異なる視点から魔軍の敗北ぶりが描かれている。前掲③では語りには描かれていない登場人物の感情や勢いなどが唱われているのに対して、④の内容は直前の語りの内容に比較的沿ったものではあるが、それでも単に語りの内容を繰り返しているのではなく、異なる視点からの描写や語り手の揶揄の言葉などにより、語りを受けつつもそれを更に敷衍した内容となっている。

⑤魔王有其三女、忽見父王不樂、遂即向前啓白大王、［唱］「近日恰似改形容、何故憂其情不樂？***為復***諸天相惱亂？***為復***宮中有不安？***為復憂***其國境事？***為復憂***念諸女身？惟願父王有慈愍、如今為女説來由。」

父王道云云、［唱］「***不***是***憂***念諸女身、汝等自然已成長、也***不憂***其國境事、天宮快樂更何***憂***！吾緣淨飯悉達多、近日已於成（成於）正覺。叵耐見伊今出世、應恐化盡我門徒。若使交（教）他教化時、化盡門徒諸弟子。我即如今設何計、除滅不交（教）出世間。」

於是三女遂即進歩向前、諮白父王云云、［唱］「瞿曇少小在深宮、色境歡娛爭斷得？沒（况）是後生身美貌、整（正）是貪歡遂樂時。我今齊願下閻浮、惱亂不交（教）令證果。必使見伊心退後、不成无上大菩提。」[29]

浮かない表情を浮かべる魔王に三人の娘達が問いかける場面で(⑷)、魔王と娘との会話の遣り取り全てが七言の唱で表現されている。両者の掛け合いの前半部分で娘が「為復諸天相惱亂？為復宮中有不安？為復憂其國境事？為復憂念諸女身？（天神達が面倒を起こしているのか、或いは宮中に何か不安事でもあるのか。それとも領土の問題、はたまた私達娘の事で気を揉んでいるのか）」と苦悩の原因を推察し列挙して問うと、魔王が「不是憂念諸女身、汝等自然已成長、也不憂其國境事、天宮快樂更何憂！（お前達の事を心配しているのではない。もう十分に大人なのだから。領土の事で悩んでいる訳でもないし、天宮は心地良く何の心配もない）」と一つ一つ否定して返すというように、娘の七言四句の問い掛けに魔王が全く同じ七言四句のリズムで呼応しており、更には娘の類字（為復、憂）を含む問いに対して魔王も類字（不、憂）を含む答えを返している。問いと答えとの字句数に

[29] 語りに続く唱の部分は紙幅の都合で改行せず、[唱]と記すことによって唱の始まりを示した。⑤の校勘意見で相違のある部分は以下の五箇所である。選の「近日已於成(成於)正覺」「沒(况)是後生身美貌」、輯は校勘意見無し。また、選の「若使交(教)他教化時」「除滅不交(教)出世間」「惱亂不交(教)令證果」はいずれも「交」を「教」に修正しているのに対し、輯は校勘無し。

おける同調に類字の効果が相俟って、実にリズミカルな掛け合いが展開されている。また、魔王が続く七言八句で苦悩の原因を語り「一体どうしたらよいものか？」と投げかけると、魔女はまた同じく七言八句で呼応して仏の弱点を指摘し「自分たちが下界に行って成道を阻止して見せます」と解決策を提示しており、魔王の悩みに直ぐ様且つ的確に対応する娘の様子がリズミカルでテンポよい七言の唱によって表現されている。

⑥１姉妹三箇、道何言語、［唱］「不是天為孌、都緣自作灾。嬌容何處去？醜陋此時來。眼裏晴如火、胸前瘻似魁。欲歸天上去、羞見醜頭顋。」
２魔女三人、變却姮娥之貌、自慚醜陋之軀、羞見天宮、求歸不得。遂即佛前蹦跪、啓請再三。當尓之時、道何言語、［唱］「不悟前生業障深、直來下界詣雙林。蓋為父母恩義重、不料魔家力來(未)強。腦亂如來多罪障、容儀變却受怨沉。惟願釋迦生慈憫、捨記(愆)莫記生念心。」
３佛心慈悲廣大、有願尅從、捨放前愆、許容懺謝。與舊時之美質、轉勝於前、復婉麗之容儀、過於往日。［唱］我佛慈悲廣大願、為法分形普流傳。魔女三人騁姿容、變却當初端正面。殷勤禮拜告如來、暫棄魔宮心敬善。醜女却猶(獲)端正身、口過懺除得解免。
４魔女却端正、還歸本天、當去之時、道何言語、［唱］魔女懺謝却歸天、歡喜非常禮聖賢。故之佛力垂加備(被)、姉妹三人勝於前。女見魔王説本情、翟談(瞿曇)如來道果成。我等三人總變却、豈合不遂再歸程。傾心禮拜求哀懺、方始來容罪障輕。此際世尊成正覺、魔王從此莫聲多(多聲)。定擬説、且休却、看看日落向西斜。念佛座前領取偈、當來必定座(坐)蓮花。[30]

語りによる魔女の醜い姿の描写に続く部分で(⑥)、四つの唱を主軸とした構成になっている。以下に唱の字句構成と内容を整理すると、「1. 五言八句の魔女のセリフ、醜い姿に恥じ入り嘆き悲しむ」「2. 七言八句の魔女のセリフ、罪を悔いて仏に許しを請い願う」「3. 七言八句の語り手による叙述、魔女は醜い姿に成り果て罪を悔いて許しを請い、仏の慈悲で元の姿を取り戻す」「4. 語り手による叙述、a. 七言四句、魔女は改心して美しい姿を取り

[30] 説明の際の便宜上、⑥と後出の⑦には区切りごとにアラビア数字の番号を付した。⑥の校勘意見で相違のある部分は以下の四箇所である。選「豈合不遂再歸程」、輯「豈合不(得)遂再歸程」。選「魔王從此莫聲多(多聲)」、輯「魔王從此莫□聲」。また、選の「故之佛力垂加備(被)」「翟談(瞿曇)如來道果成」「當來必定座(坐)蓮花」、輯はいずれも校勘意見無し。

戻し天宮に帰る。b. 七言六句、魔女は魔王に事の経緯を語る(経緯説明の部分は魔女のセリフ)。c. 七言二句、この時仏は真の悟りを開き、魔王は以後大人しくなった、という物語の締めくくりの言葉。d. 七言四句(冒頭は三言二句の変形型)、仏教に帰依し念仏を唱えれば必ず成仏できる、という仏教の教義」。前半二つは嘆きや哀願の感情を込めた魔女のセリフ、後半二つは語り手による叙述を主体としており、「美貌を失い醜悪な姿になる(大悲劇の発生)→嘆き哀しみ許しを請う魔女→仏の力で以前にも勝る美貌を取り戻す(悲劇のどん底からの大復活)」というように、起伏に富んだ筋書が展開すると同時に、その顛末が仏の正覚と魔王の鎮静という物語の締めくくりに、そして「仏教に帰依すれば必ず成仏できる」という教義に誠に上手く結びついて終結する。觀佛三昧・普曜には変文と同様に魔女が醜い姿に変えられてしまうくだりがあるが、魔女は元の姿に戻ることなくそのまま魔宮に逃げ帰っており、悲劇のどん底からの復活という劇的要素に欠いている。佛本行・方廣では仏の目に映る魔女は元より醜い姿であって仏の力によって姿を変えられるくだりが見られず、悲劇の発生自体が描かれていない、といったように、仏典四点いずれも変文のような劇的変化に富んだ展開にはなっていない。変文は登場人物のセリフによる感情表現の唱と語り手による叙述の唱とが織り成す劇的な筋書を展開すると共に、その聴衆を楽しませる豊かな物語性を仏教の教義に絶妙な形で結び付け融合させているのである。

(三)「魔女の誘惑」に見られる表現技巧

⑦１第一女道「世尊！世尊！人生在世、能得幾時？不作榮華、虚生過日。奴家美貌、實是無雙。不合自誇、人間少有。故來相事、誓盡千年。不弃卑微、永共佛為琴瑟。」女道[唱]「勤君莫證大菩提、何必將心苦執迷？我捨慈親來下界、情願將身作夫妻。」佛云[唱]「我今願證大菩提、説法將心化群迷。苦海之中為船筏、阿誰要你作夫妻！」

２第二女道「世尊！世尊！金輪王氏、帝子王孫、拋却王位、獨在山中寂寞。我今來意、更無別心、欲擬伴在山中、掃地焚香取水。世尊不在之時、我解看家守舍。」女道[唱]「奴家愛着綺羅裳、不勲沉麝自然香。我捨慈親來下界、誓將纖手掃金床。」佛道[唱]「我今念念是无常、何處少有不燒香。佛座四禪本清淨、阿誰要你掃金床！」

３第三女道「世尊！世尊！奴家年幼、父母偏憐、端正無雙、聰明少有。帝釋梵王、頻來問訊、父母嫌伊門卑、令不交(不令教)作新婦。我見世尊端整(正)、又是淨飯王子、三端六藝並全、文武兩般雙備。是以抛却父母、故來下界閻浮、不敢與佛為妻、情願長擎座具。」女道[唱]「阿奴身年十五春、恰似芙蓉出水濱。帝釋梵王頻來問、父母嫌卑不許人。見君文武並皆全、六藝三端又超群。我捨慈親來下界、不要將身作師僧。」佛道[唱]「汝今早合捨汝(女)身、只為從前障佛因。大(火)急速須歸上界、更莫紛紜惱亂人。」[31]

この場面⑸には語り・唱ともに語り手による客観的叙述の部分がなく、三人の魔女と仏との会話の遣り取りのみによって構成されている。その構成と内容を以下に整理する。

1.[第一女]自分の類い稀な美貌を強調し「妻になってお仕えします」と申し出る。語り部分は冒頭の呼びかけと末句以外全て四言句で、四言句十一連続の同じリズムで畳み掛けるように誘う。続く七言四句の唱で再度誘い掛けるも、仏は誘いの唱と同リズムの七言四句の唱で正覚への固い決意を述べてきっぱりと拒絶する。2.[第二女]自分の身仕舞いの良さなどを強調し「掃除など身の回りのお世話をします」と申し出る。語りの前半部分は「四四四六四四」という四言句の続く構造で、後半四句は六言句四連続となっている。続く七言四句の唱で再度誘い掛けるも、仏はすぐさま七言四句の唱で「元より清らかであるからお前に掃除してもらう必要などない」ときっぱり拒絶する。3.[第三女]自分の引く手あまたの品の良さを強調し「仏事の座具を持つ役目を務めます」と申し出る。語りは前半が四言の六連続で後半は六言の十連続、続く唱は前二女の倍の句数の七言八句となっている。仏は前二回に同じく七言四句の唱にて「お前ら魔女は前世からの業因によりはなから仏門に入ることなど出来ぬのだ」ときっぱり拒絶し、「さっさと天界に帰れ」と追い払う。

語りの魔女のセリフはいずれも四言・六言句のみから成り、同じリズムの続く調子の良い節回しであれこれ捲くし立てて誘い掛ける様が表現されている。魔女の誘いと仏の返答からなる唱の部分は第三女の誘惑が七言八句である以外はいずれも七言四句の構成で、魔女が七言四句で誘うと仏も

[31] ⑦の校勘意見で相違のある部分は、選「不勳沉麝自然香」、輯「不勳(薫)沉麝自然香」。

全く同じリズムで拒絶の返答をしており、魔女がああ言えば仏はこう返す、魔女がこう言えば仏はああ返す、というように軽妙なリズムを形作っている。最後の第三女の誘いのみ二倍の八句であることにより、魔女陣営が劣勢に追い込まれて焦り、言葉数を倍に増やして必死になって説得する様が表れている。前掲⑤の魔王と魔女との唱の遣り取り同様に、リズミカルな会話の遣り取りが語りと唱とで展開する。

三人の魔女の唱のいずれにも「我捨慈親來下界」の一句が見られる他は[32]、妻になる、側女になる、仏事の座具を持つ、といったようにそれぞれ異なる内容で誘い掛けており、「親を捨てる覚悟であなたの元に来ました」という言葉を三人の共通点として繰返すことにより、何をして仕えるにせよ私達皆相当な覚悟を持ってここへ来たのですよ、という本気のほどを強調している。また、仏に申し出る内容が「妻、側女、座具持ち」と変化してゆき、妻がだめなら側女、側女がだめなら座具持ち、というように仕える身分を引き下げつつ誘惑を繰り返すがことごとく拒否され、挙句には「早く天界に帰れ」と追い払われる。誘えば誘うほど魔女陣営の旗色が悪くなってゆく様と、あの手この手で誘い掛けるも全く相手にされない様、如何なる誘いにも全く動じることのない仏の様が上手く表現されている。

前章の「誘惑前の準備と誘惑の方法」で言及のように、觀佛三昧の発話内容による誘惑は変文のようには繰り返さず一度切りの誘い掛けであり、普曜・方廣・佛本行では美しく装うなどの前準備もなく仕草による誘惑を唐突に展開している。変文では仕草による刹那的・直情的な誘惑ではなく、「美女があなたのそばで一生奉仕する」という聴衆の想像をより豊かに膨らませ得る発話内容によって誘惑し、更にはそれを三段階に分けた会話の遣り取りの中で繰り返し且つリズミカルに表現しているというところに、仏典が変文に転換される際に成された創作上の工夫の数々が見て取れる。また、この場面は他の場面と異なり三人の魔女と仏との会話の応酬のみで構成され説明的な叙述が全くないにも関わらず、魔女陣営が次第に追い込まれて焦る様、仏の確固として揺るぎない様など、人物の言外の様相が巧みに描き出されており、会話の遣り取りを効果的に組み込んだ変文ならではの秀逸な表現といえよう。

[32] 注 27 に言及のように同じ文字や語句を断続的に繰返すのは類字であるが、同じ句を断続的に繰返すのは類句である。

四、おわりに

「破魔変文」の筋書きや内容には諸仏典とは大きく異なる部分がしばしば見られ、魔王やその門徒達を仏をも恐れぬ身の程知らずの悪人集団として描き、何の躊躇もなくあっという間に軍隊を成して仏のもとへと突撃するスピード感のある筋書を展開している。魔女達は魔王の命令によってではなく、悩める父親を思い遣って自発的に仏の撹乱を申し出、美しく着飾り豪奢な行列を成すなど入念に準備を整えて仏のもとへ向かう。そして仕草による刹那的・直情的な方法ではなく、聴衆の想像に訴える発話内容によって仏を誘惑する。これらの仏典との相違は変文が物語としての面白さを追求して作られた結果であり、また創作上の工夫という観点からして、仏典のような過度にグロテスクで生々しい言葉の羅列によって聴衆に恐怖心などの情動ばかりを呼び起こすのは変文の意図するところではなく、物語性の高い作品として、筋書展開や表現技巧に趣向を凝らすことによって聴衆の想像力を刺激し惹きつけることこそが意図するところであったためと考えられる。その表現技巧の工夫ぶりはというと、語りに見られる四・六言句を主軸とする排偶対の中には鑲嵌や類字が随所に用いられ、魔軍の個々の装備や守備位置などの細部から軍の全体像に至るまでや、仏を前に魔軍が次から次へと崩れ去るスピード感ある展開などが映像的且つリズミカルに描かれている。語りに続く唱は単に語りの内容を繰返すのではなく、語りには描き尽くされていない人物の感情や勢いなどを表現し、異なる視点からの描写や語り手の揶揄の言葉によって語りの内容を敷衍し展開する。魔宮での魔女と魔王の会話の遣り取りに至ってはその全てが七言の唱のみから成り、二者間のリズミカルでテンポのよい掛け合いが表現されている。また物語の終結部分では魔女のセリフによる感情表現の唱と語り手による叙述の唱とが織り成す劇的な筋書を展開すると共に、その聴衆を楽しませる豊かな物語性を仏教の教義に絶妙な形で結び付け融合させている。そして物語の最大の要所である魔女の誘惑の場面であるが、この部分は三人の魔女と仏との会話の遣り取りのみによって成り立ち、説明的な叙述が全くないにも関わらず、字句構成を意識的に整えた語りや唱によって人物の言外の様相までもが巧みに表現されている。「破魔変文」は教義の伝達を目的とした仏典を土台としつつもその筋書や内容は物語としての面白さを徹底

的に追求したものであり、音声で表現し伝える語り物として、語りや唱における表現技巧においても聴衆を楽しませるための様々な工夫が凝らされているのである。

［付録］

引用文①から⑦の訳。仏語の語釈や補足事項は(　)に記す。

①(魔王は鐘を叩いて門徒達を集め、)すぐさま馬頭羅刹(めずらせつ)を巡邏将軍、夜叉を先鋒大将とし、鳩槃茶(くはんだ)が戈(か)・戟(げき)(長い柄の先につけて敵を引っ掛けたり突いたりする武器)を揃えて前を行き、薜荔多(へいれいた)が武装した兵士を率いて後ろを守る。阿修羅達を突撃部隊に召喚すると目玉をカッと開いて睨みを効かせ、薜荔多を後軍として従わせれば怒気と欣喜が交錯する。更には夜叉が偵察官、羅刹が巡邏官となり、ギラリと光る剣や戟、鋭い毛並みに銅の爪、手には鉄棒、腰には赤蛇のベルトといった出で立ち。妖鬼達が前を馳せ、魍魎・鬼神が後を行く。閻羅王が司令官となって軍隊を統率し、護衛大将を掛け持つ五道将軍は敵を斬ることにも精通している。風神・雨師を喚んで軍営を成し、疫病神を呼んで部隊を為す。見たことも聞いたこともないような何万種類もの妖鬼達に、幾千ものありとあらゆる武器。そうして二手に、四方にと次々分かれて陣形作り、左に巡り右を遮り、前を払い後ろを阻む。雷鳴を陣太鼓に用い、稲妻を振って軍旗とする。豪風を巻き起こしながら前方に突き進み、毒龍を御して後方を固める。毒蛇がとぐろ巻いて地面や川一杯に充ち溢れ、神鬼入り混じって怒気みなぎらせ目玉ぐるぐる回す。更には何とも形容し難い姿形の鬼が空を飛ぶ。或る者は五つ目に六つの牙、体三つで腕八本、四つの肩に耳七つ、口は九つで頭は十、黄色の髪に赤いひげ、頭は尖って額は広い。また或る者は手首太くて腕細く、頭小さく脚長い。旗振って山河に揺らめかせ、ふうっと息して雲霧を吐き出す。太陽や月を揺り動かし天地を震撼させ、怒鳴り声揚げ号令がなり立てる。魔王自ら軍を率いて林の中へと至り、黒雲広げて墨色の雨降らす。武器の巨木が天空にひしめき、岩・山持ち上げて太陽や月を覆い隠す。強烈な突風吹いて木を抜き砂を吹き飛ばし、世の中のどちらが東西かも分からなくなり、昏くて南北の区別もつかない。　②仏の装備は魔軍とは全く異なり(普通の武器は用いず)、「忍辱」の鎧兜を着けて「智慧」の刀を執り、

「禅定」の弓を引いて「慈悲」の矢をつがえ、「十力」の馬に乗って「精進」の鞭を打つのみである。「慚愧」の刀を振り上げぬ内に魔軍の大将は恐れ慌てふためき、「智慧」の剣を持ち出すまでもなく魔王は怯え懼れる。煙や炎を吐く輩は自らその火に焼かれ、岩・山持ち上げる徒は自らその重みに押し潰される。魔兵達が弓を引こうとすると弦が切れ、矢を放とうとすると蓮の花が咲き、槍は振り回さぬ内に折れ剣は出番の来る前に刃が落ち、雷鳴は念仏の音となり雹は真珠と成り変わる。魔軍の旗が見え隠れすると芳しい風が自ずと生じ、猛火・黒煙は檀香と成って漂い降りてくる。仏がその神通力を使えば魔王は為す術なく怯えるばかり。　③魔王は一頻り激怒すると、大勢の妖鬼や鬼神達を呼び集めた。如来が世に現れ出たのを見るにつけ、雄心たまらず怒り爆発。自分が邪神だということも省みず、山を挙げ海を引っ繰り返す勢いで仏を遣っ付けようとする。鬼神達皆々に命じるのは、「如来を心ゆくまで懲らしめてやれ」ということ。　④魔王はあらゆる方術を尽くすも、如来を揺るがすことができない。宝剣は振るうだけで刃が崩れ、弓は引こうとすると弦が切れる。山を挙げ海を掴む勢いでありったけの方術を繰り出し、攻撃用の巨木が天空を覆い尽くす。でも三界の王である如来を攻撃しようとするなんて、まるで秋の風に吹かれる落葉のよう。魔王は最高司令官という身分にも関わらず、恐れをなして慌てて身を潜めようとするけどどうにも隠れようが無い。仕舞いには自ら号令下し、急スピードで兵を引き揚げ魔宮へ逃げ戻る。自分が邪神であることを省みず、お釈迦様に無謀な力比べを挑むなんて。（お釈迦様に比べれば大した力を持たない）小聖の阿羅漢でさえ、あまたの天魔に勝る力を持っているというのに。何千万種もの鬼神達、攻撃の手を尽くして力使い果たす。陣頭でどんなに攻撃を仕掛けても、如来は毛一本も動かない。　⑤魔王には三人の娘がおり、魔王が浮かない表情を浮かべているのを見て取ると、御前に歩み寄りその訳を尋ねた。「最近ご様子が変ですが、何か悩んでおいでなのでしょうか。天神達が面倒を起こしているのか、或いは宮中に何か不安事でもあるのでしょうか。それとも領土の問題、はたまた私達娘の事で気を揉んでいらっしゃるのでしょうか。父上様、どうかご慈悲ですから、その訳をお話しください。」魔王が言うには「お前達の事を心配しているのではない。もう十分に大人なのだから。領土の事で悩んでいる訳でもないし、天宮は心地良く何の心配もない。全ては浄飯王太子の悉達多が、最近

成道を果たしたためだ。奴の出現に我慢ならず、門徒達が皆教化されてしまうのではないかと心配なのだ。奴に教化を許した日には、門徒達は一人残らず仏門に入ってしまうだろう。一体どうすれば奴を亡き者にし世に出られないようにしてやれるだろうか」。娘達が歩み出て言うには「瞿曇(くどん)は幼い頃からずっと宮殿の奥暮らし。外界の色恋沙汰には免疫がないはず。ましてや年若く見目も麗しいとくれば、まさに悦楽を貪りたくなる年の頃です。私達が南閻浮提(なんえんぶだい)(人間界)に下って誘惑し、成道を阻止して見せます。必ずや奴の信念を揺り動かし、完全な悟りを開くのを防いでみせます」。⑥１姉妹三人言うことには、「天から降ってきた災いではなく、自らが招いた禍。美貌が消え去ったかと思えば、醜い姿が現れ出た。瞳は火のように真っ赤で、胸のこぶは小山のよう。天宮に帰りたいけど、この醜い姿を晒すのは恥ずかしくて堪らない」。２魔女三人、嫦娥の美貌は変わり果て、醜い姿に恥じ入るばかり。天宮に帰りたくともみっともなくて帰れない。遂に仏の前に跪き、何度も許しを請い願う。この時言うことには、「自分の前世の罪業の深さも知らずに、お釈迦様のもとへのこのこやって来ました。両親に深い恩義を感じているせいか、我々魔家の力が遠く及ばないなどとは夢にも思いませんでした。お釈迦様を誘惑するなんて誠に罪深きこと。姿変わり果てて怨めしさは募る一方。お釈迦様のお慈悲と憐憫の情によって罪をお許し頂けるのを願うばかりです」。３仏の慈悲の心は誠に深く、願えば必ず叶え、罪を許し懺悔を聞き入れる。与えられた美しさは以前にも勝り、蘇った麗しさは過去を超えるもの。[唱]仏は慈悲深く全てのものを救おうとなさり、説法のために分身してあちこちに至りあまねく伝える。魔女三人美貌をひけらかし、醜い姿に成り変わる。如来にしきりに請い願い、暫し魔宮の悪を捨てて善を尊ぶ。醜女は元の姿を取り戻し、口業を悔い改めて許しを得る。４魔女は元の姿を取り戻し、天の魔宮へと帰ってゆく。その時言うことには、[唱]魔女は罪を悔い改め天に帰りゆき、すこぶる喜び仏を敬う。仏の力で恩恵賜り、姉妹三人以前に勝るとも劣らない姿となる。娘達は魔王にまみえ、事の経緯を語り出す。「瞿曇如来様は仏果を取得なさいました。我達三人とも醜い姿に変えられてしまったのですが、だからといって帰ってこない訳にはいきません。心から罪を悔いてお願い申し上げ、ようやくお許し頂き罪が軽くなりました」。この時世尊は真の悟りを開き、魔王はこれよりあれこれ物言うことなくなった。もう少し話し

ましょうか、いや今日はこれまでにて。日が落ちて西に傾いてきましたので。念仏を唱え偈を受け取れば、来世で必ず成仏することができますよ。⑦１一番目の娘が言うには「お釈迦様、お釈迦様！この世に生きられる時間はそう長くはありません。華やかで贅沢な暮らしを楽しまないなんて、ただ虚しく時を過ごすようなもの。私は見目麗しいことこの上なく、自分で言うのも何ですが稀に見る美貌を持ち合わせております。貴方様に生涯お仕えするためわざわざやって参りました。どうか卑しき者と足蹴にしないで。仲睦まじい夫婦になりましょう」。[唱]娘「正覚を得ようなんてことおやめになって。そこまで身を投じてまでして固執しなくてもよいのでは？私は親を捨ててこの下界へやって参りました。貴方様と夫婦になりたいと心より願っているのです」。仏「私が正覚を得ようとするのは、説法によって衆生を教化するため。輪廻の苦海から涅槃の境地へ教え導くのが私の使命なのだ。誰がお前と夫婦になるものか！」２二番目の娘が言うには「お釈迦様、お釈迦様！金輪王家の子孫であるにも関わらず、王位を捨てて山の中で一人寂しくお暮らしになっている。私が参りましたのは他でもありません。山中にご一緒して掃除、香焚き、水汲みなどのお世話をするため。ご不在の時にはお留守番をいたします」。[唱]娘「美しい衣装を身に纏うことを好み、麝香を燻らさなくても良い香りを放つ。親を捨ててこの下界へやって参りました。このたおやかな手で寝床の掃除をいたします」。仏「この世の一切は生滅し、変化し続け常住するものなどない。香を焚かない所のほうが珍しくどこにだって香は薫る。我は仏座で禅定に入り元々清らか。誰がお前に寝床の掃除などさせようか！」３三番目の娘が言うには「お釈迦様、お釈迦様！私はまだ幼いため両親に特に可愛がられ、品の良いことこの上なく、稀に見る聡明さも兼ね備えています。帝釈天や梵天がしきりに婚儀を持ちかけてきましたが、先方の家柄が良くないのを理由に両親が断りました。お釈迦様は見目麗しく、しかも浄飯王の子息でいらっしゃる。学問・伎芸・才覚兼ね備え、文武両道。両親を捨ててあなた様のためにこの南閻浮にやって参りました。妻にしてくれとは申しません。仏事に使う座具を持つ役目を務めさせて頂きたいのです」。[唱]娘「十五の年の私は、水面に顔を出したばかりのハスの花のよう。帝釈天・梵天がしきりに求婚にやって来るも、家柄が釣り合わぬと両親断る。貴方様は文武両道、学問・伎芸・才覚群を抜く。親を捨ててこの下界へやって参りまし

た。これからは私がお仕えしますから僧侶のようにご自分で座具を持つ必要はありません」。仏「お前等女が仏の道に入るには女の身を捨てる必要があるが、魔界の女は前世の業因により男に転生することすらできないのだ。さっさと天界へ戻れ。くだらぬ事ばかり言って邪魔するんじゃない」。

参考文献

羅宗濤(1972)「破魔變文題材考」『敦煌講經變文研究(中國佛教學術論典104)』高雄・佛光山文教基金会

黄慶萱(1975)『修辭學』台北・三民書局

項　楚(1988)『敦煌變文選注』成都・巴蜀書社出版

周紹良・張湧泉・黄征(1998)『敦煌變文講經文因緣輯校』南京・江蘇古籍出版

松浦友久(1994)「対偶表現の本質―関連諸説との比較において―」『文芸論叢』42 大谷大学文芸研究会

侯紀萍(2006)「佛經魔女誘佛與破魔變文之比較」『東呉中文研究集刊』13 東呉大學中文研究所學會

本論文 於 2021 年 11 月 20 日到稿，2022 年 1 月 26 日通過審查。